

〔書評と紹介〕

森 公章著

『古代郡司制度の研究』

森田 悌

本書は、著者が卒業論文作成以来つづけてきた古代地方支配に関わる評・郡司制度についてまとめたもので、章立により内容を示すと次の通りである。

第一部 律令制地方支配の成立過程

第一章 評の成立と評造―評制下の地方支配に関する一考察―

第二章 評制下の国造に関する一考察―律令制成立以前の国造の存続と律令制地方支配への移行―

第三章 律令制下の国造に関する初歩的考察―律令国家の国造対策を中心として―

第二部 郡司任用制度の研究

第一章 律令国家における郡司任用方法とその変遷

第二章 郡司補任請願文書とトネリ等の郡領就任

第三章 評司の任用方法について

第四章 試郡司・読奏・任郡司ノート―儀式書等に見える郡司の任用方法―

第三部 郡司制度の行方

第一章 雑色人郡司と十世紀以降の郡司制度

第二章 九世紀の郡司とその動向

七世紀の評制の成立から九世紀以降の律令郡司制の変質に至るまでをとりあげており、古代地方制度の要である郡司制度の全面的説明を意図している。第一部では前代の支配制度である国造支配から評制の成立してくる過程を論じ、国造と評司・郡司との関係の追究がなされている。

第二部では郡司の任用制度を論じ、従前の研究で余り触れられていない儀式書における記述を検討し、具体的なあり方の説明を図っている。第三部では平安期に出現するさまざまな肩書の雑色人郡司をとりあげ、一員制郡司の成立や郡司職をめぐる政治状況とそこにおける郡司の動向について論及している。本書の研究はいずれも史料に基き丁寧な考察を展開しており、新見が少なくなく、興味深い論述となっている。尤も八世紀以前の評司・郡司を論じるとなるとどうしても依拠史料が断片的なそれにならざるを得ず、九世紀以降となると郡司の具体相を示す史料が多くなるが、時代・事象をどのように把握するかとなると論者の間で見解の相異があり、著者とは必ずしも一致しない理解があり得るようである。

第一部で扱っている国造と評司・郡司に関り、著者は令前国造と令制国造との間に断絶を認めることに消極的で、律令国造を地方神祇職とみる所見を否定し、地方行政・政治に関与する存在とみている。著者のかかる理解は石母田正氏が令前国造について整理した国造法の世界（『日本の古代国家』）の存続をベースとし、出雲国造および他の国造のあり方から導かれているのであるが、著者の行文をみる限り令制国造が現実の行政・政治に関わっているとの所見を導くのは困難なように思われるのである。比較的史料が豊富な出雲国造の場合についてみるに、神賀詞奏

上の場で出雲国造は郡司・郡司子弟を率い事に当っているが、これは祭祀担当者として部内の郡司・郡司子弟を引率しているのであって、地方行政・政治に関与していると判断できるような事態ではないだろうと思われる。神賀詞奏上のための潔斎の間「斎内不決重刑、若当校班田者亦停」とある点について著者は、出雲国造が地方政治に対する影響力を有していることを示すと解しているが、確かに影響力を及ぼしているとはいえ、この様なあり方をもつて地方政治・行政への関与と評価するのは当らない。斎内における重刑の執行を停止したり校班田を行わないことにしているのは、出雲国内を静謐に保ち、潔斎を滞りなく行うことを意図しているのである。校班田の実施となれば国内が騒がしくなり潔斎にとり不都合な事態の出現が予想されるので、その停止を言っているのである。重刑・校班田の停止は祭祀・神事の円滑な進行のための措置であり、出雲国造の神事執行を妨げる要因の排除以上でなく、しかもこれを行うのは出雲国の国司・郡司であつて国造ではないのである。祭祀職として部内に影響を及ぼすことと部内の政治・行政に関与することとは自と別箇の事柄であり、このあたりに関し著者の考察に方法的不備・曖昧さがあるという思いを禁じ得ない。国造が防人の指揮者になつている（評者は防人集団の国造・国造丁を国造そのものとみている（拙著『天皇号と須弥山』『国造と防人』）のも、防人指揮が国造の権能に関つていとは把え難く、国造兵衛の如きとみるべきものであろう。国造兵衛をもつて国造に武官の要素ありとは言えない。国造が地方政治に影響を与えている例は確実に存し、神護景雲三年三月辛巳紀の陸奥大国造道嶋嶋足を介在させた大量の改賜姓などはその好例であるが、行政・政治

権限とは自と別である。矢張り令制国造は神祇職であり、太政官に対する神祇官、また太宰府や遣外使節団に置かれた主神の如きものとみるべき存在である。

永昌元年（持統三）に那須直韋提が那須評督に任命されたことが刻記されている那須国造碑銘を例に著者は、国造と評司の並在を推論しているが、私は、後の大領に相当する評督と著者が部内支配において権限を有するとされる国造の並在には少なからず矛盾めいたところがあるので、著者の所説は再検討を要すと考えている。『三代実録』貞観三年十一月十一日条には「孝徳天皇御世、国造之号永停止」とあり、原則として評の建置とともに国造は廃止されたと思われるのである。国造の廃止となるとそれらの人たちの不満を惹起したことが推測されるが、従前の国造は後の選叙令郡司条の「其大領外従八位上、少領外従八位下、其大領少領、才用同者、先取国造」の原型的あり方に従い評督・助督に任用されていたであろうから、右制度の改革は円滑にすめられたことであろう。尤も旧国造の号が停止されても、国宰―国司に対応するかたちでの新（令制）国造が置かれるようになったのは云うまでもない。また旧来の国造も、国造としての実権限は失つても遺制的ないし名譽的称号として国造を称したことが考えられるように思う。『常陸国風土記』の立評関係記事をみていくと、立評後においても従前の国造が国造を称している如きあり方が看取されるが、右述した事情、プロセスを想定すればよいであろう。韋提の評督任命にあつては、下毛野方面における那須地域の特殊性（那珂川を介しての常陸方面との関連や陸奥国に接する地理的特性）を考慮すると、持統三年に至るまで那須国が存続し、この年に評の施行

と韋提の評督起用がなされたと解すことができるのではあるまいか。著者は正倉院宝物銘文中の「下毛野奈須評全二」をもって天武十三年頃以前のものとみ、その段階において那須評と那須国造の並存を云うのであるが、右銘文をもって天武十三年以前とすることに然程の論拠があるとは思われない。

第二部の郡司補任に関わる儀式書の記述を検討している行文は、既述した如く従前の研究では余り触れられていないところであり、誠に興味深く、本書の成果のうちの尤もなるものとの評価し得るように思う。もともと儀式書中の記述を官符や格の世界と結びつけるとなると、著者も結論を出し難いと吐露している箇処がある如く、理解しにくいところも少なくない。評者も関った試郡司の場合に畿内郡司が関係するか如何についても（拙稿「畿内郡司と試練」『日本歴史』四七四号所収）、著者は結論を保留しているが、私見によれば、延喜式部式試郡司条でも弘仁式部式のそれでも別扱いとして北辺・西海道を挙げて畿内について触れていないのは不備・杜撰であり、畿内についても試練を行っていたことを想定してよいと考えている。畿内を含む郡司読奏では試練を経たものについて奏上することになっているのであるから、畿内郡司についても試練があったはずなのである。郡司は国司による考課をうけるが、考選文申送の日付に関し畿内と畿外とは前者は十月一日、後者は十一月一日という相異がある。この相異が試練の期日に関しても畿内外による違いをもたらし、式文中に畿内のそれが措かれなくなっている事態が考えられるように思う。

猶、著者は『類聚符宣抄』第七に採られている郡司補任を求める国司

解とそれに対する奉勅宣旨を読奏に関わる史料と見做している。しかし評者は、そこにみえる宣旨が奉勅に基く大臣・納言による宣により国解への判定を行っており、読奏であるならば基本的には擬階奏や除目召名の奏上と同性格で、補任予定者を一括して奏上し勅裁を得るものであつて、個々別々に判定結果が宣旨で出されるとは考えられないので、従い難い理解のように思われる。『類聚符宣抄』の郡司補任を求める国解と宣旨は読奏や郡司召の儀と関ることなく、官奏に類する手続に關つてい

るのではあるまいか。平安中期において国解奏上―勅裁という手続により郡司補任が行われているとすれば、郡司読奏や郡司召という儀式書にみえる儀式は多分に形骸化したかたちで執行されていた可能性が考えられる。擬階奏や列見が摂関期のころ実を喪っていたことが確実であるが、読奏や郡司召も同様の推移をたどっているであろう。

第三部では擬任郡司制の展開や平安期郡司を巡るさまざまな動向について論じている。多岐にわたる事項がとりあげられ、著者は誠に巧妙、手際よく郡司制の変遷を論述しているといつてよいであろう。郡司の職務忌避、徴税能力の低下、王臣家との結合等に論及しつつ郡司制の変遷に一の見通しを立てており、史料に依拠した説得性に富んだ議論が展開されているのである。尤も郡司を巡る状況は複雑であり、一筋縄ではないかないという側面がある。郡司は一方で受領に協力し徴税、輸貢に励めば、他方で敵対しケースによつては提訴・襲撃する例さえある。郡司それぞれの立場（資質・資力・権威の有無等）、また受領支配の強弱、王臣家の進出如何等により多様な行動をとつたであろうことが推測される。郡司は受領の苛政を訴える旁ら善状を出すことさえ行っているのである。

第三部の読後感として評者は関連史料を巧妙に綴叙する著者の力量に感銘を受けつつも、総体としての郡司制度の動向は何だったのか、という思いがするのを免れなかった。結局ここまでくると制度としての郡司の問題でなく、政治、ないし実態としての郡司のあり方に踏みこまなければイメージを把握しないのかもしれない。

以上甚だ簡単であるが、森公章氏の新著の紹介と若干の評語を記してみた。紹介の不備、そして佞評にわたる部分については著者の御寛容をお願いする次第である。

（吉川弘文館刊、平成十二年二月、三八〇頁）

（もりた・てい 群馬大学教育学部教授）